

展望

白秋の新幽玄体

小島 なお

歌論書『毎月抄』で十体のひとつとして提唱され、定家みずからが実践した幽玄体。そののち七百年ほど歳月を隔てた昭和十年、北原白秋が主宰誌「多磨」創刊の際に掲げたのは「新幽玄体」の言葉であった。

多磨の期するところは何か。浪漫精神の復興である。「詩」への更生である。日本に於ける第四期の象徴運動である。

近代の新幽玄体の樹立である。正統を継ぐ芸術良心の、ひたむきな純一への集中である。(中略)直観こそはと思はれる。写意正しく、写生亦徹して、初めて濛ぶ或る香ひである。或る影であり、或る響である。その或るものとは何か。余情である。余韻である。幽玄の風色である。

白秋曰く、新古今(第一期)の、俳諧(第二期)の、明星(第三期)の象徴運動のどれとも異なる新しい象徴の創生。

牡丹花に車ひびかふ春ま昼風塵の中にわれも思はむ 『椽』

雪面のしろくまぶしき日の光林檎磨りつつ我はるにけり

人は死に生きたる我は歩きあて蛤をむく
店を見透かす

「多磨」とその歩みを共にした第九歌集『椽』から引いた。いずれも物と物(人)の放つ仄かな気配が互いに慎重な距離を取りながら干渉し合う。物理的には干渉でありながら、「今」在ることによる物同士のおのずからなる存在の干渉。

重厚に緻密に花びらを重ねる牡丹の花。車道沿いに咲くその花の構造の神秘を、車の立った砂埃と風とが震わせる。真昼間の停滞した時間と、走りすぎてゆく車の風塵のあかるい濁りとが、襲深い花の奥へ奥へ沁み入ってゆく。「われも」の「も」の意識はおそらく牡丹花へ向いている。花が花の命を生きる当然に、自身にとつてのあたらしい詩の創出があるということだろう。

二首目はすぐに「君かへす朝の敷石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ」が浮かぶ。第一歌集『桐の花』から晩年期の『椽』へ。

歌境の変化が如実に見てとれる。韻律の音楽性は息を潜め、音も時間も場面も静謐な気配

を沈潜させる。空から地へ落ちる雪の垂直の時間と、林檎を磨る横方向の手元の動き。その遠近の交錯に、柔らかに摺り下ろした林檎と雪のひかりが反照し合うよう。両者の気配の引き合いのあわいにただ「我はるにけり」。

三首目は弟子であった島田旭彦を悼む作。貧しく病死した彼の死と歩いている自分の生。そこには何の関わりもない。しかし、見るともなく見えた「蛤をむく店」が他者の死と自分の生の媒介となり、二人を背中合わせに引き寄せる。斎藤茂吉の「めん雛に砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり」とどこことなく通う味わいが感じられる。

〈新幽玄体〉とは白秋にとつてどのような意味を持ち得たか。昭和十年、五十歳の白秋は視界を失いつつあった。そして時代は、満州事変ののちの日中戦争目前であった。いわゆるシュールの語で括られるような奇想、非現実性という意味ではむしろ第二歌集『雲母集』などの方がわかりやすく表出している。けれど、表層に現れるレトリックから作品を眺めるのではなく、詠われた意識や目的という側面から歌を眺めるとき、シュールレアリスム運動が目指した無意識の探求・表出による人間の全体性の回復という本来の意図に思いがけなく接近してゆく。